

## 長崎大学

## 「新しい教養教育の一步と課題」

長崎大学  
学長特別補佐  
大学教育機能開発センター  
副センター長

橋本 健夫



[2013年5月11日 東京リクルートGINZA8ビル]

## 1. 長崎大学における新しい教養教育

### 教育改革への始動は 「全学共有学士像」から

大学で培うべき能力として、社会人基礎力・ジェネリックスキルが強く指摘されています。そのような中、長崎大学では、3つの視点(①どの国の人もコミュニケーションがとれる人②世界的視野で将来が語れる人③自己主張ができ行動できる人)で、『国際社会でのリーダーの育成』を教育目標として掲げ、教養教育の改革を進めています。

大学における教養教育についてはさまざまな議論や主張があり、全国の全大学が一致するような教養教育のあるべき姿というものは見当たりません。本学では、全国の大学がそうであったように、リベラルアーツの修得を目標に展開していましたが年々不満の声が大きくなりました。これには2つの原因がありました。1つめは、学生が楽勝科目に流れてしまったということです。私たちがこの科目を取ってほしいと思う科目には、学生の目は注がれませんでした。そして2つめは、教養教育は、学生にとっても、教員にとってもプラスα的な存在であったということでした。

この悪循環を断ち切るために、教養教育の改革を始めました。まず、教養教育を根本から変えようと徹底的な議論を試みました。その上で、どのような教育形態がいいのかを考え、その枠組みの構築に取り掛かりました。この中では、教養教育の改革から専門教育の改善へつなげること、卒業後は国際社会でのリーダーとなる

ような人材を育成することという方針を確認しました。

具体的には最初に、大学の理念から導いた卒業時に持つべき能力、卒業時にこういう人になってほしいという人材像を、全学共有学士像として決めました。それは、①研究者や専門職業人としての基礎知識を持つ人、②自ら学び、考え、主張し、行動変革できる人、③環境や多様性の保全に貢献できる人、④地球と地域社会及び将来世代に貢献できる人というものです。全学でまず共有学士像を共有し、これに学部固有の目標を付け加えれば、ディプロマポリシーが描けると考えました。

そして、学生がこの学士像を達成するためにはどのような教育を施せばよいのかという議論をし、教養教育から専門教育への影響を考えつつ、教育を語る大学の文化を創造しようとしたのが3~4年前です。従来、大学には研究を語る文化というものはありましたが、教育を語る文化というものはありませんでした。そこで、これまで教育を置き去りにしてきたという点を真摯に反省し、教育を語る文化を創造しようと考えました。

教養教育を変えるには単位数をどうするか、外国語をどうするか等の議論がありましたが、結果的には単位数を増やすという決断をしました。全国一少なかった教養教育の必須単位数である30単位を、その約1.5倍の40~46単位に増やしました。ここには、教養教育の重要性を学生にしっかり認識させようという狙いがあります。

従来は、人文科学、社会科学などのいくつかの分野から、学生に自由に履修科目を選ばせ、自分でカリキュラムを作らせていました。これは自分で学ぶことを前提に、学生の意思を尊重したからです。しかし、学生は必ずしも私たちが望むような履修を行ってはくれませんでした。対策として、100人以上の教養教育のクラスは設けないことにしましたが、これも楽勝科目に200~300人の履修希望者が集中し、担当教員がそれを認める形であったという間に破られてしまいました。

そこで、従来方式を改め、モジュール方式に変更することにしました。履修に際して選ぶのは科目ではなくモジュールです。現代的課題をテーマとしたそれを考えるにあたって関連性の高い科目を1つのモジュールに編成し、そのひとまとまりを履修させることで、課題解決を伴った体系的な学びを実現させようと考えたわけです。長崎大学は、モジュールを、「21世紀社会で求められる批判的精神や課題探究能力等の獲得を可能にするひとまとまりの科目群を現代的な課題であるテーマを軸に構成するもの」と定義しました。そして、その科目群を持った24のモジュールを作り、学生たちに提起することにしました。学生たちは自分の学びたいモジュールを選んでそこに含まれる科目を学ぶとともにジェネリックスキ

るを身につけていくという仕組みです。

モジュールは、全学モジュールと学部モジュールの2種類に区分しました。全学モジュールは、教養教育として全学で提供するものです。現代社会の課題をテーマとして取り上げて、それを多面的に学ばせます。ある課題を社会科学的手法や自然科学的手法を使って学び、次世代市民の基盤を作っていくことになります。一方、学部モジュールでは、これから専門分野を学んでいく上での基礎を形成します。このように新しい教養教育の仕組みを、2種類のモジュールで形成することになったのです。

モジュール方式の最大の利点は学習コミュニティが形成されることだと考えています。1つのモジュールを10名前後の教員が担当し、100名程度の学生集団を1年半にわたり継続的に教育していきます。これによって、学生と教員のコミュニケーションが深まり、高い教育効果を期待できると考えています。常に学生のそばに教員がいて、学習コミュニティの充実を支援することになります。また、モジュール内での教員間のコミュニケーションも密になりますので、教員と学生の間だけでなく、教員と教員の距離も近くなり、さらに教育効果を高めるであろうと考えています。加えて、学ぶ内容という観点からは、1つのテーマについて集中的に学習することで、モジュールでの学修が副専攻的な役割を果たすことも期待しています。

例えば全学モジュールで掲げるテーマは、「安全安心」、「環境」、「経済」、「国際社会」など24種類にわたっています(図表1)。

現代的課題	テーマ	モジュールI	モジュールII
安全安心	安全で安心できる社会 責任部局:工学部 連携部局:医歯薬/ 経済・教育/ 環境・水産	○健康と医療の安全・安心 ○社会と文化の安全・安心 ○科学と技術の安全・安心	○医療とリスク管理 ○先端医療と安心安全 ○社会の安心安全 ○破壊事故とヒューマンファクター ○エネルギーと資源の危機
環境	環境問題を理解する(A) 責任部局:環境科学部 連携部局:工学・教育・ 経済・水産	○地球温暖化を考える ○水環境を考える ○循環型社会を考える	○環境と倫理 ○環境とエネルギー ○環境教育 ○経済活動と環境のバランス ○海洋環境と海の生物多様性
経済	現代の経済と企業活動 責任部局:経済学部	○経済活動と社会 ○企業の仕組みと行動 ○経済政策と公共部門	○国際社会と日本経済 ○地域社会と日本経済 ○企業行動と戦略 ○社会制度と経済活動 ○経営情報と会計情報
国際社会	グローバル社会へのパスポート 責任部局:留学生センター	○国際的視点に立った政治と法 ○国際的視点に立った経済 ○異文化理解	○企業の国際展開とその課題 ○国際機関の役割と実際 ○NPO・NGOの国際協力 ○経済及び金融のグローバルライゼーション ○途上国支援と国際保護

1つのモジュールは、3科目からなるモジュールIと5～6科目からなるモジュールIIから構成されています。履修の仕方は、例えば「安全安心」を選ぶと、モジュールIでは3科目すべてが必須、モジュールIIでは5科目から3科目選択することになります。

教員集団は1モジュールが10名前後で、責任部局と連携部局に所属しています。例えば、テーマが「安全安心できる社会」では、責任部局は工学部であり、連携部局が医学部、薬学部、経済学部等になります。また、学生には自分が所属する学部以外の学問を幅広く学んでほしいという意図から、「現代の経済と企業活動」では、責任部局が経済学部ですので、経済学部の学生は、このモジュールを履修できません。このように専門性の高いモジュールの場合には、それに関連する学部は受けられないという制約をつけています。

また、本学では、モジュール方式の導入とともにアクティブラーニングも推進することになりました。このために、アクティブラーニングは何なのかというFDも多く開催しました。また、その推進のため教材研究費の配当などで入れも行いました。アクティブラーニングにふさわしい教室環境の整備もそのひとつですが、まずはFDの場で、先生方に教育手法としてアクティブラーニングを紹介し、アクティブラーニングに興味を持つようにしました。さらに、現在モジュール科目は全て授業公開を行っています。

アクティブラーニングに向けた準備を具体的に示すと次のようになります。第1に、教室環境の整備です。机を3人掛けから1人机に変更し、ホワイトボードを1教室に前面だけでなく四方に置き、これに合わせてプロジェクターも数個備えました。第2に、教材研究のための準備金の支給です。これは、新しいことにチャレンジするにはさまざまな準備が必要でそのためのお金もいるだろうと考えたからです。第3には、FDを多く開催しました。第4には、アクティブラーニングの成果についての可視化への試みをしました。これは、モジュール方式とアクティブラーニングを実施した結果、どのような能力がどれくらい伸びたのかわからないと、改革の成果を語れないと考えたからです。具体的には、アクティブラーニング用の授業評価項目を設定し、1年次と3年次でPROGを行いました。

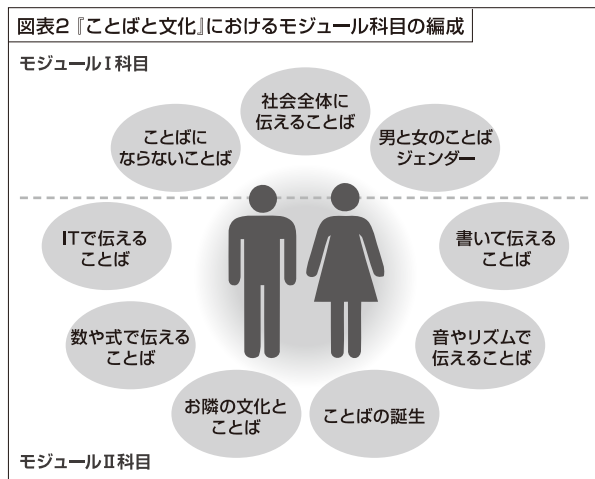
ここでPROGに言及したいと思います。実はPROGの導入にあたっては、その必要性について学内で厳しい議論がありました。PROGが成果表示に適しているかどうかかわからないという意見もありましたが、とにかくトライしてみようと1年生と3年生の全員にPROGを適用することになりました。1年次の結果と3年次の結果を比較して伸びているかどうか確認できること、また入学間もない1年生には、PROGを行うことによって自己の特性が図示されれば今後の学習の励みになればいいと考えました。

全学モジュールの具体例として、私が担当する科目を紹介します。私が担当するモジュールのテーマは『ことばと文化』です。私は教育学部の出身ですが、教育の武器のひとつは“ことば”であると考えています。“教師の背中

を見て育て”という伝統的な教育観もありますが、語るべきことをしっかりと伝えられるかどうかで教育効果は大きく変わると考えています。このような経緯から、“ことば”を大事にしようという気持ちを込めたテーマです。このモジュールには、さまざまな分野の先生に協力してもらっています。音楽もひとつの“ことば”ですし、数学もひとつの“ことば”であると捉えてモジュールを作りました。このモジュールに関しては、2012年度は、88名の学生が履修しました。

どれほど上手いことばを使っても心がこもっていなければ通じないことを、ぜひ学生に伝えたいと思い、心を込めて“ことば”を活用するというを重視しています。モジュールを編成するにあたっては、コミュニケーション能力とは良き聴き手(聴く力)・良き話し手(話す力)となることであり、多文化理解能力とは良き隣人(知る力)になること、そして、協調・協働能力とは良き友人(働きかける力・前に進む力)になることであると考え、これら3つの力を“ことば”によって涵養できるように工夫しました。

**図表2**はモジュール科目の編成の詳細です。まず、モジュールIの『社会全体に伝えることば』というのは「マスメディアと表現」という授業です。『ことばにならないことば』は、「心とことば」という授業です。これらを2012年度後期に行いました。モジュールIIでは、履修生88名が40～50名に分かれて授業を受けます。少人数であるため、学生も活発に発言すると思います。



「マスメディアと表現」の授業では、①各学部が混合した班を作る、②毎時間、班活動を組み入れた授業を行う、③班の討議をもとに意見を発表する、④班ごとのプレゼンテーションを優先する、⑤予習課題は個人でおこない、班活動に反映するという5点を基本方針にしました。このように、アクティブラーニングを積極的に取り入れた授業を目指しました。アクティブラーニングでは、ともしれば知識の獲得が忘れられがちですが、その点には気をつけました。この成果をPROGでみることができ

ればと考えています。

## 2. PROGとの関連

PROGの受験生に許可をもらって、PROGと成績評価や出席状況との関連を予備的に分析しました。サンプル数も約80名と少なく、確定したことは言えませんが、次のような傾向がみられました。

①リテラシー総合・コンピテンシー総合の両評価に関して、長崎大学の学生およびモジュール『ことばと文化』の履修生全体のそれぞれの平均は、全国の全受験者の平均と比較すると、リテラシーは少し高いものの、コンピテンシーは低くなっています。

②リテラシー総合に関して、モジュール『ことばと文化』履修生の平均は、国公立大1年生の平均を上回り、履修生の男女を比較すると男子の方が少し高い。

③コンピテンシー総合に関して、モジュール『ことばと文化』履修生の平均は、国公立大学1年生の平均と比較してやや低い。履修生の男女別に国公立大学1年生の平均と比較すると、男子は高いが女子は低い。

サンプル数が少ないですが、PROGの評価を成績評価などに関連付けて分析すると、次のようなことが浮かんできました。

**図表3**はリテラシーとコンピテンシーのレベル分布を示した表です。27.9%の層はコンピテンシーが低くてリテラシーが比較的高めという層です。この集団はかなり人数が多く、ここを右上に引き上げることができれば、このモジュールの成績が上がったことになります。

図表3 『ことばと文化』履修生のPROG評価(レベル分布)

		PROG評価(レベル分布)				
コンピテンシー	7	—	—	—	—	
	5,6	—	4.7	7.0	4.7	
	3,4	3.5	12.8	15.1	4.7	
	1,2	1.2	8.1	27.9	10.5	
		1.2	3.4	5.6	7	
		リテラシー				

最もボリュームの多いセル  
 10%以上のセル

PROG分析結果より引用

**図表4**は大学での成績とリテラシーのレベル分布を示す表です。ここからは、リテラシーが高いほど成績も良い評価になっています。

図表4「マスメディアと表現」履修生の成績とリテラシーのレベル分布

PROG評価(レベル分布)					
成績	AA	—	1.2	3.6	2.4
	A	1.2	8.4	20.5	10.8
	B	2.4	8.4	13.3	3.6
	C	—	7.2	13.3	3.6
		1.2	3.4	5.6	7
リテラシー					

最もボリュームの多いセル  
 10%以上のセル

PROG分析結果より引用

では成績とコンピテンシーの関係はどうでしょうか。  
**図表5**にあるとおり、成績とコンピテンシーには全く相関がみられませんでした。コンピテンシーが低くても成績が高い学生がかなりいます。

図表5「マスメディアと表現」履修生の成績とコンピテンシーのレベル分布

PROG評価(レベル分布)					
成績	AA	2.4	2.4	2.4	—
	A	21.7	15.7	3.6	—
	B	14.5	8.4	4.8	—
	C	8.4	9.6	6.0	—
		1.2	3.4	5.6	7
コンピテンシー					

最もボリュームの多いセル  
 10%以上のセル

PROG分析結果より引用

教養教育の科目には、専門教育の科目に比べて欠席・遅刻が非常に多いという感触を持っています。そこで欠席回数とコンピテンシー、成績得点とコンピテンシーの関係を調べました(**図表6**)。

図表6「マスメディアと表現」履修生の成績および欠席回数とコンピテンシーの相関

		成績得点	欠席回数
コンピテンシー(中分類)	親和力: EXPECTATION	0.006	0.123
	協働力: EXPECTATION	<b>-0.106</b>	0.129
	統率力: EXPECTATION	<b>-0.258</b>	0.082
	感情制御力: EXPECTATION	<b>-0.123</b>	0.236
	自信創出力: EXPECTATION	<b>-0.115</b>	0.170
	行動持続力: EXPECTATION	<b>-0.214</b>	0.201
	課題発見力: EXPECTATION	<b>-0.075</b>	<b>-0.051</b>
	計画立案力: EXPECTATION	0.148	<b>-0.149</b>
	実践力: EXPECTATION	0.079	<b>-0.028</b>

PROG分析結果より引用

**図表4**ではリテラシーが成績と相関があることが示され、**図表5**ではコンピテンシーには成績との相関がないことが示されました。しかし**図表6**をよくみると、計画立案力と実践力の相関係数は他の能力のそれと比較して高くなっており、1回の試行だけなので偶然なのかもしれませんが、成績と結びついているようにも思われます。一方、欠席回数は、課題発見力・計画立案力・実践力との相関はありませんが、感情抑制力や行動持続力と相関のありそうな傾向がみえます。

PROGの基準が正確であるという前提に立つと、欠席・遅刻をする学生は、“感情を制御することができて、行動を持続することができる”と判断できます。従って、本モジュールを“欠席する学生は欠席しようと思っただけで行動している”との仮説を立てられるかもしれません。これは教養教育の軽視にもつながります。そして教養教育の充実にとってゆゆしき問題です。詳しく継続して分析する必要があります。

今のところPROG以外にはコンピテンシーを測れる物差しを持ち合わせていませんが、PROGによってその傾向は読み取れるという可能性が出てきました。

これ以外にも、所属学部ごとの学生のリテラシーとコンピテンシーを分析することで、各学部の傾向の把握も試みました。例えば、ある学部のように成績、リテラシーおよびコンピテンシーのいずれも高い学生が集まる学部もあれば、リテラシーは高いがコンピテンシーが低い学部もあります。このように所属学部ごとの特性を把握していれば、より学生に即した対応も可能になるのではないかと思います。

つけ加えて、PROGの良い点のひとつとして、試験だけでなくその結果説明会も行われるということが挙げられます。この結果説明会は、試験結果の分析の上で実施されます。本学においては、結果説明会の実施後にこれの説明会についてのアンケートを実施しました。アンケートでは、説明会そのものに対する学生の満足度、自己発見に役立ったかどうか、自身が開発したい力、向上させたい自身の能力への関心などについて問うものでしたが、本学ではいずれの質問においても極めて肯定的な回答が得られ、この効果を確認することができました。

このように、学生たちは私たちの期待通りの反応をしています。私たち教員が学生に深く指導できない部分、例えば“あなたはこのような能力を伸ばす必要がある”とか、“自身の傾向を知った方がいいです”という面を説明会で補ってもらえたと感じています。

## 4. 考察

最後に考察として、当学が推進する新しい教養教育を実施していく上での課題を以下に4点挙げることによってまとめとします。

まず1つめが、教員の意識改革が必要であるということです。従来の教員間の関係は、あたかも不可侵条約が結ばれているかのように、互いの教育についての指摘や要望を指摘し合うことができませんでした。しかし、本学の教養教育においては、各モジュールで担当する100名の学生をどう育てようかという教員同士の議論の場を設けることができました。そして、教員間の連携が、徐々にではありますが、意識改革にもつながりつつあります。

2つめが、教授方法の改善を推進するということです。ここではいかにアクティブラーニングを授業に取り入れられるかということがポイントであると考えています。その実施にあたっては、教員がチームになり、さらにTAも参加させて行っていますが、なかなか難しい点もあります。「100名の学生を10名の教員が指導するということであれば、10名の学生を1名の教員が個々に深く教えればいいのではないか」と弱音を吐きたくなるほど、労力と時間を必要とします。だからこそ、教員同士が手を取り合って推進していく必要があると考えています。

3つめが、学生の意識改革が必要であるということです。「学問の専門性を深めてその活用を図っていくためには、人間形成の基盤が前提であり、その涵養は教養教育による」という認識をいかに学生に与えるかということです。教養教育の授業に遅刻・欠席が多い学生にその理由を聞いてみたところ、その学生は悪びれることなく、「専門の試験があるからだ」と答えました。私たちは、そう思っている学生たちも惹きつけるような教養教育の授業を展開しなければならず、またそのような学生の意識も打破しなければなりません。

4つめは、社会人基礎力育成の見える化を実現することです。この実現には、授業評価と教員の教育業務評価を改善することが必要だと考えています。そして、これらにおける物差しの1つとしてPROGは活用できるのではないかと期待しています。

以上長崎大学の試みと課題、そしてこれからの夢についてお話させていただきました。